

(p 3より続く)

普通の口語の文を自由に書かせるようになり、当時のリアリズム文学の影響もあって、子どもが生活をリアルに表現する作文も行われてきていました。文学の世界では、ソ連や世界の左翼的な作家によるリアリズム文学が主張され、労働者はプロレタリアート(無産階級)と言われ、これら労働者を主人公としたリアリズム文学はプロレタリア文学と言われました。小樽出身の小林多喜二は、当時のプロレタリア文学の代表作家で、その作品「蟹工船」は1929年、「戦旗」に発表されたのでした。このようなプロレタリア文学の影響もあって、子どもたちに苦しい生活、貧困でなやむ農家の姿や、その中でけなげに力をあわせ、思いやりを持ち、働く家族の行動やそこでの心情を、ありのままに作文に書くことを指導する教育実践が、昭和初期に四国と東北の小学校教師たちによって始められました。(～中略～)

★大田さんは、映画の中で、「調査は事実を明らかにできるけれども、人間の心の中を示してはいない。教育は、人間の心への働きかけだ」と語っていますが、これも、生活綴り方教育実践に学んでの言葉です。



大田さんは次のように書いています。「ものいわぬ農民、労働者、その子どもたちが、自分の生活を散文ふうスタイルにこだわらないで語り始める…子どもがあらかじめ頭の中に用意していた書物で得た知識だとか、観念的な枠組みというようなものが、そのようなまなましい告白に対面してたちまちにたじろぐ、こういう経験を私は…しばしば持つようになります」(同上p105)

それまでの社会科学の社会調査に学んで、教育への住民の要求などを始め、生活実態、そこでの問題点などを社会調査し、その地域の社会生活の各分野ごとの問題点やその解決に必要なと思われる知識・技術を収集して整理し、子どもの発達段階に合わせて編成するカリキュラム構成理論とその実践例がアメリカから大量に輸入され、そのような考えが文部省によって推進され、教育研究者たちの指導によって各地で実践されたのが、いわゆる「新教育運動」でした。大田さんも、この方式で、故郷の広島県本郷町の小学校を舞台に、「地域教育計画」を立て、実践したことが、映画でも語られています。映画では、この動きは、日本の政治の逆コース的な動きの中で途絶えさせられたように描かれています、

もちろん、そのような動向に関わるけれども、上に述べた生活綴り方教育実践に学んでの反省や、ソビエト教育学の研究に基づいての系統的教育の考え方からの批判もあって、アメリカ輸入の新教育からの脱却という反省が行われたと言うべきことなのでしょう。これは、教育研究者に等しく生じたことで、この結果、梅根悟氏らを指導者とする「コア・カリキュラム連盟」は「日本生活教育連盟」と改称し、カリキュラム編成についてもその理論を修正しました。



◇釧路大学生12月行事から

★大田さんは本郷町でやったような調査、それに基づくカリキュラム編成というやり方を反省し、調査をやるとしても、活動の質を変えて、調査者が被調査者の心に働きかけ、深い人間関係を創り出し、対象である人々の本音、目的意識を了解し、それに沿った事態の真相をとらえていくというような配慮と展望もった調査活動でなくては、まさに人々の「事実」は明らかにならないのではないか、とも述べています。生活綴り方の実践は、このように鋭く日本の私たちが行っている教育、学習、研究と言われる活動を、それは借り物ではないか、お前自身、日本の現実に向き合っているか、いま日本で、あるいは世界の各地で生きている人々の現実にきちんと向き合っているのか、と迫る力をもった実践だったのです。

この実践から学ぶなかで、近代の市民社会発展のなかで創られてきた基本的人権尊重を土台とする教育のあり方を、日本の現実の中で真に根づかせる道を求めての追究を大田さんは行ってきたのです。「生活綴り方では、子どもを束にして扱うのではなくて、一人ひとりのかけがえのない存在としてとり扱うということ、子どもを目的として扱い、かつ目的と感ずる…その一人ひとりに即しての子どもの内面からの自我を掘りおこし、自己実現を促す…(これは)教育実践そのものの質にかかわる原則、…教育を教育たらしめている原則を含んでいる。」(同上、p127)

★このような教育実践の質に関わる原則は、その教育が、保育といった幼児段階であろうと、大学といった高等教育機関での教育であろうと、ともにひとしくあてはまる原則と言わなければなりません。教える者と教えられる者と普通言われる関係を、基本的人

権、そこから導き出される学習権を持って、自ら学んで成長しよう、自ら変わろうとする学習者の努力を、うまく成就するように援助する、という援助者が教師であり、教師は、この関係の中で学習者(子ども)をより深く理解し、人間についての理解を豊かに広げようという学びを行い、このように共に人間として豊かになる、共に学ぶ者という関係にしていくことが、教育を考える際の基本のコンセプトとすると大田さんは考えているのです。これは、戦後、新憲法が公布され、基本的人権が認められ、欧米で近代市民社会成立以来、発展させられてきた子どもの人権尊重、子どもの興味・関心を大事にして、それを出発点として(デューイ流でいえば、子どもを中心として)子どもの成長発達を援助することを考えるという近代教育価値論を日本に根づかせることに努力をしてきた大田さんが、この近代教育の価値は、生活綴り方実践に実践化されていたのだと発見したというか、再認識したのだと言えるのではないのでしょうか。

★生活綴り方教育の特徴として、生活をありのままに綴る、という活動は、書く本人の自立の歩みなのだ、ということに大田さんは、さらに注目しています。「自分というものをそれをとりまく現実とのかかわりの中で、本音として吐露する。そのことで自分と現実を直視する。人びとの前に表現することと直視することとは同時に成立する…学校でいえば教師、学級の仲間とかの検証をうける。いろいろと意見をきく。そのことによってさらに自分を確かめ、まわりの事実のとらえ方、真相をまた確かめる。そういうことによって自分をつくりまわりをつくる…自分をつくり、まわりを新しくつくるという相関運動によって、既成事実としての現実への埋没から1歩抜け出る」(同上、p124)

埼玉の青年学級での「ロハ台」の実践や都留文科大学学長時代の実践が、この「現実埋没状態からの脱出、そして自立へ」という生活綴り方的実践だったことは、先にも指摘しましたが、基本的人権の考え方・近代教育価値論と繋がりがあっていることも見逃してはならぬことと思います。

★次に「地域に根ざす教育」ということを考えさせられました。地域に根ざすということは、単に地域の問題を学校教育で取り上げるとか、地域の事象を教材として学校に取り入れるといったことではありません。地域に学校を開く、学校が地域の文化センターの役割を果たす、学校が地域の人たちによって民主的に運営される、そして学校の教師と子どもたち、青年た

ちが学校のなかに閉じこもらないで社会に目を開く、世界に目を向けるということが重要なことなのです。そして、この観点は、地域の自然を守る、地域の人たちだけでなく、生きているもの、動植物すべてと共生することをも含んでいることです。(～中略～)

★大田さんの地域教育計画の構想は、アメリカの教育運動に示唆を得たものでしたが、それは、まず地域の職業構成や生産・産業実態、農地の酸性度の状況、各家庭での消費生活や健康・衛生問題、読書その他の文化生活状態などを調査し、その結果を検討する各種委員会を設け、そこでの討議を参考にして学校の教員がとくに社会科を中心に、児童に指導すべき問題・それに関する事実資料を編成し、それらを用いて子どもたちが討議を中心とした学習活動を行なう、といったものでした。委員会には住民の各層、各分野の人たちに平等に入ってもらい、民主的な討論がなされるように気配りしたもので、まさに民衆の、民衆による、民衆のための学校を創造するという運動でした。このように地域の問題を取り上げるカリキュラムを創った地域や学校は、昭和20年代に各地で多く見られたことでした。しかし33年の学習指導要領改定で、このような問題解決型のカリキュラムではなく、知識を学ぶこと中心のカリキュラムへと教育政策が転換したことや他の要因で、地域社会学校的な動きは消滅していきます。(～中略～)

★この映画はこれらの問題状況を克服する具体的な手立てを学校に即して示してはいたませんが、東日本大震災で故郷を破壊され、学校も流されてしまったような地域を復興する事が緊急課題となっている現在、学校や公的機関が真に地域の人々に支えられる形で、また地域の中で心の拠り所となるような形で復興されることが追及されなければなりません。その際の基本的な考え方が映画には示されていると思うのです。そして地域の自然に子どもたちが触れて育つことができる、いわゆるフィールド・ミュージアム構想が示されていることも、地域復興の際に大いに考慮されるべき事と思われますし、また被災地のみでなく、北海道各地域、この余市も少子化・高齢化、人口減などにより、地域が次第に活力を失ってきている状況があるわけで、これを克服していく展望をもたねばなりません。この映画を見て、その方向を皆で話し合い、探りあい、手を結び合っていく契機にさせていただけば、森監督と大田先生が何にも増してお喜びになると思われます。[下線/編集者]